View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tsukuba Repository

アレクサンドリアのクレメンス『預言書撰文集』全訳

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究
巻	68
ページ	183-203
発行年	2015-09-30
その他のタイトル	Clemente Alessandrino, Estratti profetici (traduzione giapponese)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00129357

アレクサンドリアのクレメンス『預言書撰文集』
―全訳―

秋　山　　学

序.

初期ギリシア教父の一人，アレクサンドリアのクレメンス（150－215）の著作をめぐり，筆者は本学の紀要を借りてその全訳作業を進めてきた．すでに『プロトレプティコス』(「ギリシア人への勧告」；全１巻)，『パイダゴーゴス』(「訓導者」；全３巻)，および『ストロマテイス』(「綴織」；全８巻)，そして小品『救われる富者とは誰であるか』に関しては訳出を終えている[1]．このほかに伝わるクレメンスの著作としては『テオドトスからの抜粋』(*Excerpta ex Theodoto*)，および『預言書撰文集』(*Eclogae propheticae*) が残っている．これらをすべて訳し終えたとき，他の著作家によって断片的に引用されているもの[2]を除き，クレメンスの現存著作がすべて邦訳されることになる．

本稿は，この目的を果たすべく起稿したものであり，再び本学の紀要である『文藝言語紀要』を借りて『テオドトスからの抜粋』[3]とともに『預言者撰文集』を訳出する．前者が，ウァレンティノス派グノーシス主義者の一人であるテオドトスの思想を探るための覚書風の著作であるのに対し，後者の『預言者撰文集』は，総じて旧約聖書の諸節を基に観想的解釈を展開した小品である．この著作は，洗礼の秘跡に始まって，クレメンス神学の根幹をなす「覚知」(gnōsis) の獲得と，終末論的展望の中での霊魂の神化に至る階梯を明らかにしている．特に，洗礼の秘跡に関連する重要な記述を多く含むことはよく知られており，カルロ・ナルディによるモノグラフ『アレクサンドリアのクレメンスにおける洗礼―『預言書撰文集』1－26の解釈―』[4]が出版されるなど，正統的神学の基礎資料として注目されるべきものである．

邦訳に際し，底本としてはシュテーリン（Otto Stählin，1868－1949）の手になる校訂版テキスト（*Stromata Buch VII und VIII ; Excerpta ex Theodoto ; Eclogae Propheticae ; Quis dives salvetur ; Fragmente* / Clemens Alexandrinus ; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl.

Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig: Hinrichs, 1909; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte; Clemens Alexandrinus, Bd. 3）を用いた．フリュヒテル（Ludwig Früchtel）らの改訂になる1970年の第２版については参照していないが，典拠箇所指示の充実が図られたものと思われるので，教文館版（「キリスト教教父著作集」）刊行のための見直し作業の際に活用したい．

末尾近くの第63節までは，『ストロマテイス』および『テオドトスからの抜粋』と同じくフィレンツェ写本（“L”: Laurentianus V 3）が伝えているが，それ以降の部分（第65節まで）について，同写本はその一頁分を失ったと思われるため，フィレンツェ本からの写本である４種の手写本（ミュンヒェン479，ナポリⅡAA.14，ヴァティカン・オットボニアヌス94，同98）から補う必要がある．近代語訳として，上掲したナルディによるイタリア語訳（Clemente Alessandrino: *Estratti profetici: Eclogae propheticae*, a cura di Carlo Nardi, Nardini Editore – Centro Internazionale del Libro, Firenze 1985）を参照し，あわせて便宜のために付した内容見出しに関しても，同書を参考にした．

『預言書撰文集』

１－８　水の神秘

1.1）セドラク，ミサク，アブデナゴたちは，火の燃え盛るかまどの中で神をほめたたえながらこう述べる．＜天よ，主をほめたたえよ．主をとこしえにいと高きものとせよ＞．さらに＜天使たちよ，主をほめたたえよ＞．そして＜水と，天の上にあるすべてのものは，主をほめたたえよ＞（ﾀﾞﾆｴﾙ3,59；58；60；※ﾃｵﾄﾞﾄｽによる順序と同じ）．2）このように聖書は，天と水とを浄らかな諸力のうちに配しているが，これは『創世記』の中でも明らかにされていることである（創世1,8以下）．3）かくしてダニエルは，さまざまな仕方で名づけられている諸力に，ふさわしくもこう呼びかける．＜すべての力よ，主をほめたたえよ＞（以下ﾀﾞﾆｴﾙ3,61－63；90）．そして以下でこう述べる．＜太陽と月よ，主をほめたたえよ＞．4）さらに＜天の星よ，主をほめたたえよ．すべて主を畏れる者たちよ，神々の神をほめたたえよ．あなた方は讃美し告白せよ，主の憐れみはすべての代に及ぶ＞．

2.1）＜深淵に目を注ぐ者，ケルビムに座す者よ，あなたはほめたたえられ

る＞（ﾀﾞﾆｴﾙ3,54）とダニエルは述べる．これは次のように述べているエノクに沿ったものである．＜そしてわたしはすべての質料を目にした＞（ｵﾘｹﾞﾈｽ『諸原理論』4.35；ｽﾗｳﾞ語ｴﾉｸ書40.1；12）．2）というのも深淵とは，固有の存立に関して限定を有さず，ただ神の力によって限界づけられるものだからである．3）かくして質料的な実体（ousia）は，そこから部分的な類と，さらにそれらの種が成立するものであるが，「深淵」と述べられる．つまり，ダニエルはただ水だけを「深淵」と呼んだのではないであろう．水もまた，深淵あるいは質料の象徴的な表現であるにしてもである．

3.1）＜初めに神は天と地を創造した＞（創世1,1），すなわちこれは「土質的なものと天上的なものを」の意味である．2）この解釈が真実であることは，主がホセアに対して述べている．＜行け，そして姦淫の妻と姦淫の子供らをあなたの許に引き取るのだ．なぜなら大地は，主の目に隠れて姦淫をし，姦淫を重ねたからだ＞（ﾎｾｱ1,2）．彼が述べているのは「（土という）元素」のことではなく，元素に関しては土質に属す者ども，すなわち土質的気質を持つ者ども，の意味である．

4.1）さて，御子が原初であるということについては，ホセアが明確に教えている（ﾎｾｱ2,1以下）．＜その子は，彼らによって「あなた方はわたしの民ではない」と呼ばれる場所に生まれるであろう．すると彼らもまた「生ける神の子たち」と呼ばれるであろう．そしてユダの子らとイスラエルの子らは一つに集められ，彼らは自分たちのために，一なる主権をいただくであろう．彼らは地上から高く挙げられるであろう．それこそ「イスラエルの大いなる日」である＞．2）というのも，この御子に信を置く者は，この子を選び取るからである．しかるに御子は原初であり，人はこの方を信じることになる．それゆえ預言者はこうも予言している．＜わたしはユダの子らを憐れみ，彼らの神である主のうちに，彼らを救うであろう＞（ﾎｾｱ1,7）．救いの業を行う救い主とは神の御子である．したがってこの方は原初である．

5.1）ホセアを通じて，霊は＜わたしはあなた方の教師である＞（ﾎｾｱ5,2）と述べている．＜主の山でラッパを吹き鳴らせ．いと高き所で角笛を響かせよ＞（ﾎｾｱ5,8）．2）洗礼とは再生のしるしであり，救い主の教えを通じての，質料の除去であって，救い主とは常にわれわれを抱き運ぶ偉大にして強力な流れなのではないだろうか．3）かくして主はわれわれを無秩序から脱させて照らし，光の中へと導く．この光とは影のない，もはや質料的でないものなのである．

6.1）この質料の河および海に対しては，主の力によって二人の預言者がこれを打って別離させた．つまりそれぞれのの水の距離に関し，神の意向によって質料を区切ったのである．2）二人の浄らかなる将軍がこれに仕えた．彼らによってしるしが信じられたのである．それは実に，義人が質料から生じ，その質料を通じて最初の事物を導くためであった．3）それら将軍たちの各々に対して，われわれの救い主の名が刻まれたのである．

7.1）再生は，まさしく＜水と霊＞（ﾖﾊﾈ3,5）を通じて行われる．そのあり方は，すべての創造と同様である．なぜなら＜神の霊が深淵の上を漂っていた＞（創世1,2）からである．2）そしてその故に救い主は，自身には何ら必要でなかったにもかかわらず，洗礼を受けた．これは，再生を遂げる者たちのために，すべての水を聖化するためである．実にこのような次第で，われわれは身体に関してのみならず，霊魂においても浄らかなものとされる．3）実にこのことのしるしは，われわれのうちの目に見えない部分まで聖化されること，そして霊魂に織り込まれた不浄なるものが，新たにして霊的な誕生により非質料化されることである．

8.1）「天の上なる水」．洗礼は「水と霊」によって行われるものであるから，二種類の火に対する薬である．すなわち不可視的なものに付く火と，可視的なものに付く火である．したがって水も，一方では思惟的なもの，他方では感覚的なものであることが不可欠である．つまり火の二重性に対する薬であるべきなのである．2）そして，地上的な水は身体の汚れを洗い落とす一方，天上的な水は思惟的にして不可視的であるがゆえに，比喩的に「聖霊」と呼ばれる．それは不可視的な事どもを浄化するものであって，言わば「霊の水」とも呼ぶべきものであり，それは地上的な水が「身体の水」であるのと同様である．

9－13　洗礼の霊的効果

9.1）神は，その善性によって，恐れをも善性と混ぜ合わせた．というのも各々の者に有益な事柄を，ちょうど医者が病弱な者に提供するごとく，またしつけのなっていない子供に父親が提供するごとくに，すでに神は提供しているからである．2）＜自らの鞭を控える者は，自らの息子を憎む者＞（箴言13,24）．主もその弟子たちも，恐れと労苦のうちに振舞った．3）かくして信厚き者の身体が病むとき，それは，何らかの過誤のために道を誤った者に対して主が叱責したり，これから犯しそうな過ちに対して前もって防御したり，あ

るいは悪魔的な（※ナルディの提唱する読みに従う）力のために外界から攻撃が生じた場合に，主がそれを阻まなかったりするのは，彼自身ないしその隣人たちにとって，何らか有益な事柄のために，範例とするためなのである．

10）汚れた身体のうちに，あたかもいにしえの船に乗って航海する者たちのごとくに住まう者たちは，もはや仰向けではなく，常に神に向けて秩序づけられつつ祈りに身を捧げている．

11.1）長老たちは，身体面で何も苦痛を被っていない場合，大いに心を痛めてきた．というのも彼らは，この世において何も罪の報いを受けていないのではないか，と恐れていたためである．その罪とは，肉のうちにある者どもに，知らない間に大いにまとうものであり，それは来世にあっては，厳しい裁きを伴う．それゆえ彼らは，この世にある間に，それが癒されることを良しとする．2）したがって，恐れるべきものは，外界より襲い来る病ではなく，それを通して病が襲い来る罪であり，霊魂の病であって，身体の病ではない．なぜなら＜身体はまったく草のようなものであり＞（ｲｻﾞﾔ40,6），身体的なものそして外界の美とは＜つかの間のものに過ぎないのに対し，目に見えぬものは永遠＞（2ｺﾘﾝﾄ4,18）だからである．

12.1）覚知のある部分に関しては，われわれはすでにこれに与かっている．だがある部分に関しては，われわれが有している部分を通して，切にこれを希望している．というのもわれわれは，すべてをすでに摂取しているわけではなく，またすべてに関してこれを欠いているわけでもなく，むしろ，善き世と父祖伝来の富の言わば＜保証＞（2ｺﾘﾝﾄ1,22）として予め手にしているからである．しかるに主の道の路銀とは，主による至福である．なぜなら主は＜探せ，そして神の王国を求めよ．そうすれば，その他のすべての事どもは添えてあなた方に与えられるであろう．なぜなら父は，あなた方にとって何が必要であるかを知悉しているからである＞（ﾏﾀｲ6,33；6,32）．3）かくして主は，止むことのない熱心さばかりでなく，思い悩むようなあり方にすら言及している．主はこう述べる．＜あなた方は思い悩んだからといって，年齢に何かを付け加えることはできない＞（ﾏﾀｲ6,27）．4）というのも神は，何を有し，何から離れることがわれわれにとって有益であるかを明確に知っているからである．したがって主は，この世に関する思い悩みからは身を虚しくし，神への思い悩みに満ちることを価値あることとしている．5）＜なぜならわれわれは＞，腐敗するものを身から引きはがす前に，腐敗せざるものを＜身にまといたいと，切に願いあえいでいる＞（2ｺﾘﾝﾄ5,2）からである．6）というのも信仰が注ぎ出さ

れるとき，不信仰が消え失せるからであり，覚知と正義に関しても同様だからである．したがって，霊魂を虚しくするだけでなく，神によって身を満たすことが不可欠である．7）というのも悪が止むとき，悪はすでに存在しないが，善をいまだ獲得していなければ，善はまったく存在しないからである．善でも悪でもないものは，虚無である．8）＜悪は，浄められ誰も住まなくなった家に戻って来る＞（ﾏﾀｲ12,44）．これは，救いに資するものがまったくそこに取り込まれなかった場合であり，そこに住み着くのは，先に住んでいた不浄なる霊だけでなく，それとともに，他の七つの不浄なる霊も取り込まれるのである．9）それ故，悪から身を虚しくするだけでなく，霊魂を善き神で満たすことが不可欠であり，これこそ，選び抜かれた住まいである．というのも虚しきものが満たされると，その後で，聖性が神によって保たれるように，封印が続いて行われるからである．

13）＜すべての事柄は，二人もしくは三人の証人によって立証されねばならない＞（申命19,15）と述べられている．これは，父と子と聖霊の許に、の意味であり，この三位の証人と援助者のもとに，語られている掟は守られねばならない、という意味である．

14－20　洗礼の実際と要理

14.1）断食とは，意味の上では食物を断ずることであるが，食物はわれわれをより正しき者としたり，より不正なる者としたりすることはない．しかるに神秘的な意味では，各々の者にとって生命が食物に由来し，食物を摂らないことは死の象徴であるのと同様に，われわれもまた，世の事どもに関しては断食を行うべきである．それはわれわれが世に対して死に，その後神的な食物に与かることによって神に生きるためである．2）断食は，とりわけ霊魂を質料とは無縁なもの，浄らかで，肉体とともにありながらも虚無なるものとし，神的な言葉の傍らに置く．3）以前の生と罪とは世の食物であるが，神的な食物とは信仰・希望・愛・忍耐・覚知・平安・節制である．4）＜神の義に飢え渇く人々は幸いである．その人々は満たされるであろうから＞（ﾏﾀｲ5,6）．しかるにこの欲求を受け取るのは霊魂であって肉体ではない．

15.1）救い主は，信仰よりも祈りのほうが力強いということを，信篤き使徒たちに表明している（ﾏﾙｺ9,18）．ある悪霊に取りつかれた人に対して，弟子

たちがその人を浄めることができなかった際に，主はこう述べた（ﾏﾙｺ9,29）．＜このような場合は，祈りによらなければ，決して正されない＞．2）信じる者は，罪の赦しを主から得るが，覚知のうちに至った者は，もはや罪を犯さないがゆえに，それ以降，赦しを自らのうちに携えるのである．

16.1）癒しや預言やしるしと同様に，覚知に関わる教説は，神が働くことにより，人間を通して完遂される．というのも神は人間を通じて，その力を明らかにするからである．2）預言は，実に正確にこう述べている．＜その時わたしは，彼らのために一人の人を遣わす．彼は人々を救うであろう＞（ｲｻﾞﾔ19,20）．かくして神は，自らある時には預言者たちを，ある時には使徒たちを，人々のための救い手として派遣する．このようにして神は人間たちによって善行を遂行するのである．3）というのも神には，あることはできるがあることはできないということはあり得ないし，いかなることにも決して非力であるということがない．また，神があることには積極的で，あることには消極的なのに事が生起するということもない．またあることは神によって為されるが，あることは別の者によって為されるということもない．それどころか神は，われわれを人間を通じて生み，人間を通じて教育したのである．

17.1）神はわれわれを，それ以前には存在していなかったものとして創造した．というのももしわれわれが先在していたとすれば，われわれがどこにいたのか，どのようにして，また何のためにわれわれがこの世に来たったのかを，われわれが知っていなければならないはずだからである．だがもしわれわれが先在していなかったとすれば，誕生の唯一なる原因は神である．2）したがって神は，われわれを存在せざるものとして創造した．ちょうどそれと同様に神は，成ったわれわれが，もし適わしくそれに叶うと思えるならば，自らに固有の恩寵によってわれわれを救うが，もしそうでないとすれば，われわれそれぞれの終末に向けてわれわれを導くであろう．なぜなら＜神は，生ける者どもと死せる者ども双方の主だからである＞（ﾛｰﾏ14,9）．

18.1）神の力を見るがよい．神は，人間に関わる際に，存在しない者たちを存在へと導き，すでに成った者たちを，年齢に応じた進歩によって成長させるばかりでなく，信じる者たちを，各々に固有のあり方に従って救う．2）また時間や時機，実りや要因を瞬時に変える．というのも，生起する事どもの端緒をも終末をも個々に固有の仕方に従って測り取るのは，唯一なる神だからである．

19.1）人は，信仰と恐れから覚知へと進歩を遂げることによって，＜主よ，

主よ＞（ﾏﾀｲ7,21）と言うことができるようになるが，それは奴隷のような様においてではない．彼は＜われらの父よ＞（ﾏﾀｲ6,9）と言うことを学び，＜恐れに向かう隷属の霊＞（ﾛｰﾏ8,15）を解放し，愛によって＜子たること＞（ﾛｰﾏ8,16）へと進歩を遂げる．その時すでに，彼は愛によって，それ以前恐れていたものを恥じるようになっている．というのも，もはや彼は，遠ざかるべき事どもから恐れによって遠ざかるのではなく，愛によって掟のうちに留まるからである．使徒はこう述べる．＜われわれが「アッバ，父よ」と言うとき，霊自らが証ししている＞（ﾛｰﾏ8,15；ｶﾞﾗﾃﾔ4,6）．

20.1）だが主はわれわれを＜尊い血で＞（1ﾍﾟﾄﾛ1,19）買い戻し，かつての苦い主人，すなわち罪から解放した．その罪のために＜悪の諸霊＞（ｴﾌｪｿ6,12）がわれわれを支配していたのである．2）かくして主はわれわれを，ともに嗣業に与かる息子また友人として，父の自由へと導く．3）というのも主はこう述べている．＜わたしの父の意向を行う者たちは，わたしの兄弟であり，嗣業を同じくする者だからである＞（ﾏﾀｲ12,50）．＜だからあなた方は，この地上で血縁上の父を父と呼んではならない＞（ﾏﾀｲ23,9）．なぜなら地上にいるのは支配者であって，父は天にいるものだからである．＜天のまた地上におけるすべての家族はこの父から来たるものである＞（ｴﾌｪｿ3,15）．4）なぜなら愛は，自発的意思による者たちを支配するが，意思が反している者たちを支配するのは恐怖である．この恐怖とは「悪しき」ものである．しかるに善に向けて教育する者はキリストへと導き，救いをもたらすものでもある．

21－26　洗礼の経綸の理由・実質・目的

21）もし誰かが神を思念するのであれば（相応しく，ということはあり得ない．一体いかなる想念が神に適うものでありうるだろうか？　もちろん可能な限りにおいてである），偉大にして把捉を超え，最も美しき＜近づき難き光＞（1ﾃﾓﾃ6,16），あらゆる良き力，あらゆる優れた徳を嗣業とし，万物を守護し，憐れみを愛し，無情動で，善良にして，あらゆる形相を蔵し，万物を前もって知悉し，混迷を廃し，甘美で，輝ける，混淆物のない存在を思念するがよい．

22.1）霊魂，すなわち神の恩寵は，自己自身から動く．それ故，霊魂が有するもの，すなわち欲求（prothȳmia）を，言わば救いのための貸付金として，それ自身から要求する．というのも善，すなわち主が霊魂に与えるものは，霊魂固有のものであることを欲するからであり，これは身体として運ばれるため

に，無感覚なものではないからである．2）というわけで，手にしたものについてはこれを有し，望むもの・欲したものについてはこれを手にし，手にしてこれを支配しようと努めかつそれが可能なものについては，これを支配することになる．3）そのために神は，霊魂に選択の余地を与える．これは，神自身が必要なものを告げ，選択されたものが受け取りかつ維持することができるようにするためである．

23.1）ちょうど救い主が，身体を通じて語り，癒しを行ったのと同じように，以前にはそれが預言者たちによって行われ，現在では使徒たちと教師たちによって行われている．2）というのも教会は，主の働きに奉仕している．それゆえこの時も人の姿を摂ったが，それは主を通して父の意向に奉仕するためであった．3）そして人間愛に満ちた神は，常に人の姿を帯びるが，それは人間を救うためなのであり，以前には預言者たちの姿を帯びていたが，現在では教会の姿を摂っているのである．というのも，似た者が似た者のために奉仕することが，似た者の救いのために適切だからである．

24.1）われわれは，土でできたものである限りは，皇帝のものである．しかしながら，皇帝とは一時的な支配者に過ぎず，古い人間は，この皇帝の土でできた像に他ならない．この古い人間に向かって，われわれは駆け遡っていたのである．2）したがって土質的な部分については，この皇帝に返却すべきであり，この土質的な部分こそ＜土質性の像のうちに，われわれが担っているもの＞（1ｺﾘﾝﾄ15,49）であり，一方＜神のものは神に返す＞（ﾏﾀｲ22,21）べきなのである．というのも情動の一つ一つは，あたかもわれわれにとって，文字であり刻印であり，しるしの如きものなのであるから．3）いまや主はわれわれにとって別の刻印であり，別の名と文字をそのうちに意味するものである．それは不信仰に代わる信仰，またそれに連なるものである．かくしてわれわれは＜天上的な方の像を身に帯びつつ＞（1ｺﾘﾝﾄ15,49），質料的なものから霊的なものへと移し変えられてゆくのである．

25.1）洗礼者ヨハネは＜わたしはあなた方に水で洗礼を授けるが，わたしの後から来る方は，あなた方に対し，霊と火のうちに洗礼を授ける＞と言う（ﾏﾀｲ3,11）．しかるに火で誰かに洗礼を授けた人はいない．ちょうどヘラクレオンが「何人かの人々は，火でもって，封印された人々の耳に語り掛ける」（ﾍﾗｸﾚｵﾝ断片49）と言っているように，使徒の言葉を耳にする．＜手に箕を持って，脱穀場を隅々まできれいにし，麦を集めて倉に入れ，殻を消えることのない火で焼き払う＞（ﾏﾀｲ3,12）．2）したがって「火によって」という句に「聖霊によっ

て」という句が加えられているのである．なぜなら，麦は殻（つまり質量的なかぶせもの）から霊によって分かたれ，殻は霊により篩われて別にされるように，霊は，質量的なエネルゲイアの峻別的な力を持っているのである．3）しかるにあるものは，生まれざるもの・腐敗せざるものから生じたが，それは生命の種子である．これは火に属すものであるかのごとくに集められ，別にされるのに対して，質量的なものは，より強力なる者と共棲する限りにおいて留まる．だが，そこから切り離される際には破滅する．というのもそれは，存在するということを他のもののうちに有しているからである．であるからこれすなわち霊は，可能態においては分離的である．一方火は破壊的である．もっとも火は，質料的なものだと考えねばならない．4）もっとも，救われるものは麦になぞらえられる一方，霊魂の周囲に派生的に生息しているものは，殻になぞらえられている．一方は非実体的であり，もう一方は分かたれた質料的な部分である．つまり非実体的なものには霊をもってなぞらえているのである．この霊とは，微細かつほとんど浄らかにして知性を超えるものである．これに対して，質料的なものには火をもってなぞらえている．この火とは，邪悪でも悪しくもなく，むしろ力を秘め悪を浄化するものである．というのも火とは，善く力あるデュナミスであって，より悪しきものを破滅させる一方でより優れたものを救い取る部分だと考えられる．それゆえこの火は，預言者たちの書にあっては，思慮あるものと述べられているのである．

26.1）実にこういうわけであるから，神が＜焼き尽くす火＞（申命4,24）と言われる際，それは，悪ではなく力の名と象徴であると受け取られねばならない．2）というのも火は，諸々の要素の中で最も強力であり，万物を支配する．それと同じように神もまた，全能でありすべてを支配し，治め，創造し，作り，育み，成長させ，救うことのできる方であって，肉体と霊魂に対する支配力を有している．であるから火は，諸々の要素の上に立つのと同じように，神々，諸々の力，そして諸々の権能に対する全能者なのである．3）そして火の力は二重であり，片や実りの創造と休止，諸動物の誕生と生育に適うものであって，その像が太陽である一方で，片や破壊と破滅に向かうものでもあって，それは地上における火の働きである．4）というわけで，神が＜焼き尽くす火＞（申命4,24）と呼ばれる場合，その火は強く，はむかい難い力であって，その力にとって不可能なものは何一つなく，むしろ何ものをも破壊することが可能である．5）そのような力に関しては，救い主もまた次のように述べている．＜わたしは地上に火を投ずるためにやって来た＞（ルカ12,49）．すなわちこ

こでの「火」とは明らかに，聖なる者どもに対する浄化の力である一方，質料的なものに対する，彼らが言うところの「焼尽的」，われわれが言うであろうところの「教育的」な力なのである．しかるに火は恐れをもたらす一方，光は発散性を有する．

27－31　覚知に向けて

27.1）長老たちは，書き記すことをしなかったが，それは，伝承を教え説こうという配慮が，書き記すことに関する別の配慮によって煩わされることのないためであり，また語られるべき事どもを予め考察するための時間を，書くことに消費することがないようにするためでもある．2）おそらく彼らは，まとめることと，教え説くことは，形相の上で，同じ性質の行為ではないと信じて，その行為に本性的に適った人々に譲ったのであろう．3）というのも語る人の言葉の流れは，よどみなく，力を伴って運ばれる．それはもしかすると，強奪するような力をも秘めている．しかしながらある場合には，たまたま出会った人々によって，時には試みに逢い，精密な吟味にさらされ，高度な注意に値するようなこともありうる．また，いわば書かれざる教説の確かめもありうるし，後続の世代の者たちのために，編集されて声が伝えられるということもある．4）というのも長老たちの遺した教えが，書き物によって語る際，伝承の上で，仕え手となる書き手を必要とし，それに出会う人々の救いに資するということがある．5）したがってたとえば，磁力を持つ石は，他の質料を添えたとしても，適合性の点で，ただ鉄のみを引き寄せる．ちょうどそれと同じように，聖書を読む人々は数多いが，ただそれを理解することのできる人々だけを惹きつけるのである．6）というのも真理の言葉は，ある人々にとっては＜愚かしいもの＞（1ｺﾘﾝﾄ1,23以下），またある人々にとっては＜躓き＞であるが，ごく少数の人々にとっては，神の＜智慧＞であり同様に＜力＞であることが発見される．しかるに妬みは，覚知者とは無縁である．7）すなわちそれ故に覚知者は，あるときにはむしろより劣ったものを求め，相応しからざる者に与えたり，相応しき者に与えなかったりし，さらには幾多の愛ゆえに，すべての相応しき者に対してのみならず，時には，相応しからざる者であっても，熱心に請い求める者には分かち与える．それは嘆願のためではなく（というのも彼は名誉を愛する者ではないから），むしろ求める者が，幾多の嘆願をもって，信仰に向けて専心するその粘り強さのためなのである．

28.1）覚知者たちは，外界にある事物よりもむしろ，自らに固有の事物に妬みを抱くと言う人々がある．それはちょうど海のようなもので，海はすべての人々の前に開かれているが，ある人は泳ぎ，ある人は航行し，またある人は漁業をする．同じように大地も共有のものであるが，ある人は旅をし，ある人は耕作し，また別の人は狩猟をし，別のある人は鉱物を探し，また家屋を建てる人もある．それと同じように，聖書が読まれる際にも，ある人は信仰のため，ある人は品性に益するためにそれを行うが，また別のある人は，物事を認識することによって，迷信を取り除くためにそれを行う．2）一方陸上競技者は，オリュンピア競技会の競技場に関する知識を蓄え，教えに従って心身を鍛え，闘って勝利を収める者となる．敵対する者たち，覚知の道に逆らって進む者たちに打ち勝ち，彼らを打倒することによってである．3)というのも覚知とは，霊魂の鍛錬のため，品性の高貴さのために必須のものであり，信篤き者たちをより先鋭なる者とし，事物の精妙なる観察者とするのである．というのも，教理教授なくして信じることは不可能であり，それと同様に覚知なくして理解することは不可能だからである．

29.1）というのもこれらのものは，たとえば父と子と聖霊は，救いのために有益かつ必須である．だがそればかりでなく，われわれの霊魂も不可欠である．したがってまったく，それらに関する説明，すなわち覚知的な言葉も，有益にして同時に不可欠なものでなければならない．2）しかるに，人を統率する任を帯びた人々にとって，人に援助することの経験を積むことは，他の人々に必然的かつ博識なかたちで認識されているように見える事柄を忘れないようにすることに加え，大いに有益である．3）だがとりわけ，異端諸派の教説が提示されることは，探求的霊魂の鍛錬をもたらし，弟子を真なる教えから欺かれないように守る．その弟子は，すでに敵方の道具によって，あらゆる方面からラッパを吹き鳴らすことに精通しているためである．

30）ただ覚知者の生のみが，ちょうど「クレタ島は，死をもたらす獣を生まない」（ｱﾘｽﾄﾃﾚｽ，836b27－29）と言われているように，あらゆる悪しき業・想念・言葉から浄らかであり，全く敵を有さず，あらゆる悪魔的な嫉妬・憎悪・罵詈の外界にある．

31.1）多くの人生において，至福なる人というのは，長らく生きることによるものではなく，むしろ生きることを通じて，つねによく生きるに値する人生を送れるかどうかという点にかかっている．2）この人は誰をも傷つけることがないが，それは彼が，心において傷ついている人々を言葉ではなく，むしろ

言わば救いの，甘く魅力的な蜜によって教育するからである．かくして覚知者は，何にもましてまず，論理に適うことという次には，適合性を維持することを心掛けるであろう．3）というのも彼は，すべての情動に割礼を施し，霊魂全体を解放することによって，浄められ子化の恵みに自由となった力ある方と，それ以降の生を共に過ごし生きるからである．

32－37　覚知の神秘

32.1）ピュタゴラスは，賢者たちの中でも，諸事物に名を付ける人こそ，最も理性に富んでいるばかりでなく，最も長じた人でもあると見なされることを，意義あることとした．2)したがって諸書は正確に解釈されねばならない．なぜなら比喩のうちに語られるということが同意されているのであるから，名からその見解を探るということを主は教えているのである．その見解とは，聖霊がその事柄について有し，言い回しのうちに言わば自らの思念を刻印したものである．それはわれわれによって，多義的に語られた事柄を正確に検討して解析し，幾多の覆いのうちに隠された事柄を探り当て，学んだ事柄を表明し，受け取ることができるようにするためである．3）というのも，鉛は擦ると，黒色の中から白く白鉛が輝きを放つようになる．ちょうどそれと同じように覚知もまた，事物の輝きと明るさとを注ぎ出すのであるから，真に神的な智慧であるかも知れない．これは混じりけのない光であり，人々の中で浄らかな者たちを，いわば目の瞳のように，視覚に向けまた真理の確固たる把捉のために輝かせるのである．

33.1）われわれは，この光への憧憬から，その光の端緒に触れて自らに火を灯し，できうる限り，その光に似た者となるように努める．光に満ち，真なる光としてのイスラエル人となるのである（ﾖﾊﾈ1,47）．2）というのも主は，渇望と迫害とによって神性への類似性に抱かれる者たちを，友また兄弟と呼んでいるからである（ﾏﾀｲ12,50；ﾖﾊﾈ15,15）．

34）彼らは，浄らかなる場所・牧場が受け入れるような霊魂（※ｼｭﾃｰﾘﾝの提唱読みに従う），いわば聖なる光の声と像とを有する．しかるにまったく浄められた人間は，その全身が，心的な教えと力に相応しき者とされるであろう．

35.1）しかるにわたしは，覚知の神秘が，多くの人々には揶揄の題材をもたらし，とりわけ洗練された解釈を盛り込んだものではないと思われていることを知っている．しかしながら少数の者たちには，まるで何か饗宴の場に突如も

たらされた光でもあるかのように，当初は驚愕の故に影を投げかけるものの，次第に人々がそれに慣れてきて育まれ，その論理性に鍛え上げられて，主に対し，まるで快楽の許に喜び歓喜するかのごとくになることをも知っている（欠落が想定される）．2）というのもちょうど，快楽がその本質として，苦痛に対する解放を有するのと同じように，覚知もまた，無知に対する除去をもたらすからである．3）すなわち，とりわけ眠っている人々が，より鮮明で紛れのない夢の幻影に陥るとき，とりわけ目覚めていると錯覚するのと同じように，とりわけ無知のうちにある人々が，とりわけ知っていると錯覚するものである．だが，この眠りと幻覚から目覚めて，光と真実とを見つめる者たちは幸いである．

36.1）というわけで弟子は，意志する事柄に等しく望む事柄を所有することができて当然であるし，信仰を，望みに混淆させつつ鍛錬し気遣うことが不可欠である．その度ごとに，観想される事柄の真理を，自らへとことかけて吟味するのである．2）しかるに自分にとって適わしいと思われたならば，その時にこそ，目的をめぐる探求へと赴くべきである．というのも，ひな鳥たちもまた，翼を鍛えたのち，前もって巣の上を飛ぼうと試みるのであるから．

37.1）というのも覚知的な徳というものは，どこにあっても，美しく柔和で，害をも苦痛をももたらさず，至福である．すべて神的なものに対して，また人間たちに対して最善のことを語るべく，よく備えられている．観想的であると同時に実践的であり，人間を，神的な像として整え，愛によって，美を愛するものへと作り上げる．2）というのも美というものは，天上界にあっては智慧によって観想され思惟的であると同時に，地上にあっては，節制と正義によって，愛を通じて実践されるべきものだからである．それは人が，肉のうちにあって天使的な奉仕に努めるときに叶う．それはちょうど，人が光に満ちけがれのない場所として，身体のうちに精神を奉献する際のあり方である．

38－50　神の正しき裁き

38.1）タティアノスが，＜光あれ＞（創世1,3）というのは願望である，と述べているのに対しては，こう語るべきである．もし彼がこのように祈りつつ，上にある神のことを知っていたのであれば，どうして＜わたしは神であり，わたしを措いて他に神はない＞（ｲｻﾞﾔ44,6；45,5以下；46,9）と述べるのであろうか．

2）彼は，誹謗，戯言，無駄口，言葉によって懲らしめられ教育される者たちに対する懲罰がどのようなものであるかを述べている．39）他方で彼は，女性は髪の毛と髪飾りのゆえに，それらの上に配されている力によって懲らしめられると述べている．その力とは，サムソンの髪の毛にも力を付与したものである（士師16,17）．この力が，髪の毛の飾りを通して姦淫へと身を貶める女性たちを懲罰するというのである．

40）ちょうど，善の流出によって善化されるのと同様に，悪の流出によって悪化する．神の裁きは美しく，信篤き者たちを不信なる者たちから選り分けるあり方，より大いなる裁きを被らないようにするための先慮は美しい．裁きとは教導であるがゆえに．

41.1）聖書は，産み落とされた嬰児が，守護の天使に引き渡されると述べる．この天使によって，その嬰児が教育され成長するためである．聖書は言う．＜そして彼らは，100年にわたってこの世で信篤き者となるであろう＞．

2）それ故ペトロもまた『黙示録』の中で次のように述べている．＜火の瞬きがそれらの嬰児たちからほとばしり，女性たちの眼を撃つ＞．3）なぜなら義人は＜火打石の如くに葦を通じて光を放ち，民を裁く＞からである．

42）＜聖なる者とともにあれば，あなたは聖なるものとされる＞（詩編17,26）．すなわち，聖なる者たちの讃辞によってあなたの名は誉れを受ける．これはわれわれの認識によって，神が誉れを受ける場合である．＜主は生きている＞（列王上17,12），そして＜主は復活した＞（ルカ24,34）も同義である．

43.1）＜わたしの知らぬ民がわたしに仕えた＞（詩編17,44）．これは「わたしが律法に照らして知ることのなかった」との意味である．

2）＜他の民の子ら＞（詩編17,45）．これは「他者の財を嫉妬していた」の意味である．

44）＜主はその王の救いを大いなるものとする＞（詩編17,51）．ここで王と言われているのはすべての信篤き人々である．彼らは認識（epignōsis）と嗣業によって王国へと呼ばれた者たちである．

45）＜寛容さは蜜に勝る甘さ＞（詩編18,11）．これは慣用さそのものの意ではなく，むしろ寛容さの実りによって，の意である．というのも克己心に満ちた者が情動を感じないわけではなく，彼が情動を克服するのは労苦を伴わずしてではないからである．しかるに習慣づけができてしまうと，もはや克己心溢れる者というわけではなくなる．これは人が，聖霊の一なる習慣のうちに置かれた状態である．

46.1)「霊」(ﾏﾀｲ12,45以下）と言われているのは，霊魂のうちにありながらも，実体（ousia）に発することなく衝動に服す諸々の情動のことである．なぜなら，情動に駆られた人間は諸悪霊の軍団となるからである（ﾏﾙｺ5,9)．2）というのも霊魂それ自体が，他の変化，および他の悪のあり方を受け取ったときに,「霊を受け取った」と言われるからである．

47）御言葉は，蓄財から遠ざかるようにとは命じていない．御言葉が命じているのは，情動を離れて財と共存するようにということである．何かが偶然に起こったときに，憤ることも，悲しむことも，財を獲得したいと切望することもしないように，という意味である．すなわち主が命じているのは，情動のうちなる蓄財と，あらゆる執着とを離れよということである（『救われる富者とは誰であるか』を参照)．

48.1）神的な先慮というものは，肉のうちにある者たちのみに関わるのではない．それはまさしくペトロが『(ペトロの）黙示録』の中で次のように述べているとおりである．「胚胎されても実らなかった胎児については，より良き運命に与かるであろう．彼らは守護の天使に委ねられる．それは彼らが覚知に与かり，より良き住まいを得るためである．彼らはがこうむった苦難を受けたのは，肉のうちにあったからである」．2）しかるに他の者どもは，救いの住まいを獲得するであろう．それはちょうど，不正をこうむった者たちが憐れみを受け，懲罰を受けることなく，その褒賞に与かって留まるのと同様である．

49.1)「雌の乳は，乳房から流れ出て固着する」(『ﾍﾟﾄﾛの黙示録』断片3）とペトロは『ペトロの黙示録』の中で述べている．「雌は小さく肉食の野獣を産み，その野獣はその雌に襲いかかって食い尽くす」．この句でもってペトロは，罪によって懲罰が成立するということを教えている．2）彼が言うには，罪から懲罰が生まれるというのであるが，それは罪によって民が売り飛ばされるのと同様であり（士師2,14），まさしく使徒が言っているように＜キリストに対する不信仰によって，人々はヘビに噛まれる＞（1ｺﾘﾝﾄ10,9）のである．

50.1）長老は，胎内にあるものは生命体であると言っている．なぜなら霊魂は，浄めを終えて懐胎のために準備された母親のうちに入り，誕生に立ち会った天使たちの中で，懐胎のための時機をあらかじめ知っている者によって導き入れられ，交合に向けて女性を動かすが，種子が落とされると，種子のうちにある霊が言わば異化されて，創造のために取り込まれると言うのである．これを福音書は「万人の前での証し」(ﾙｶ1,13）と名づけている（※原文に破損ありと想定される)．2）そして天使たちは，不妊の女性に対して福音を告げる

ために，懐胎よりも先に霊魂を言わば選り分けておくのである．福音書の中でも，あたかも霊魂あるものであるかのように，＜胎児が躍り上がった＞（ルカ1,41）という．3）（原文欠落あり．）不妊の女たちは，この故に不妊なのであり，それは言わば霊魂が，種子の落下を統御しても，懐胎と誕生のために持続させるべく判別することがないからである．

51－65　正しき者たちの昇天

【詩編第18編〔現行第19編〕の解釈】

51.1）＜天は神の栄光を語る＞（詩編18,2a）．天は多様に語られる．すなわち，隔たりと周期に従うもの，また，最初に創造された天使たちの，律法に従った継続的働き，などである．というのも律法は，アダムに対し，ノアに対し，アブラハムに対し，モーセに対して，天使たちの力強き顕現により，働きを為したからである．2）すなわち，最初に創造された天使たちは，主によって動かされ，預言者たちに近い天使たちに向けて＜神の栄光＞，すなわち律法を説明する．だがそればかりではなく，地上において天使たちを通じて生起する業もまた，最初に創造された天使たちにより＜神の栄光＞のために起こるのである．52.1）しかるにここで「諸々の天」と呼ばれているのは，まずもって主のことであり，次いで「最初に創られた者たち」である．彼らに次いでは，律法以前に生きた聖なる人々であり，それはたとえば族長たち，モーセ，そして預言者たちであり，その後に使徒たちが連なる．

2）＜天は神の御手の業を告げ知らせる＞（詩編18,2b）．ここで「天」と呼ばれているのは，情動を被らず変化を被ることもない神のことであり，それは同じダビデが他の箇所でもこう述べている通りである．＜主よ，わたしの力よ，主にしてわたしの天，わたしの逃げ場である方よ，わたしはあなたを愛する＞（詩編17,2以下）．3）であるから，この天そのものが，神の両の手の業を告げ知らせると言っているのである．すなわち天が，神の使いたちの業を明らかにし，示すという意味である．なぜなら天は，神が創った人々を告げ知らせ，明らかにするからである．

53.1）＜昼は昼に言葉を伝える＞（以下詩編18,3）．天が多様に語られるのと同じように，昼もまた多様に語られる．しかるに「言葉」とは主のことである．この主は多くの箇所において「昼」とも述べられている．＜また夜は夜に

知識を告げる＞．2）悪魔は，主が解放されるであろうということを知っていたが，イエスが主であるかどうかについては知らなかった．それ故，イエスに力があるかどうかを知るために，イエスが認めるかどうかを試み，問いを発した（ﾏﾀｲ4,1－11；本文不完全か）．＜そして悪魔は，時期が満ちるまで彼の許を離れた＞（ﾙｶ4,13）．すなわちその見極めを，復活の時まで先延ばしにしたのである．と云うのも悪魔は，復活する者が主であるということを知っていたためである．3)同様に諸霊たちも，ソロモンが主であるかどうかと迷ったが，ソロモンが罪びとであるため，主ではないと知っていたのである．4）＜夜は夜に＞．諸霊たちはみな，受難ののち復活するのが主であるということを知っていた．すでにエノクも，人間たちに占星術や神託術，その他の術知を教えるのが道を踏み外した天使たちであると述べている（ｴﾉｸ書７章以下）．

54.1）＜彼らの語り，言葉，そして彼らの声すら聞こえることがなくとも＞（詩編18,4）．彼らとは，日々そして夜々ということである．＜彼らの響きは全地に及ぶ＞（詩編18,5）．2）詩人は，語りを聖なる者たちのみに転じるが，その聖なる者たちを，彼は天そして日々と呼んでいるのである．

55.1）星々は霊的な物体であり，天使たちに共有され支配されてその座を占めるが，誕生の原因ではない，ただし，大気の状態，豊作や飢饉，疫病や火事，そして人間界に関して，起こっている事柄，起こるべき事柄，起こった事柄を示すものである．2）夢に関して，星がその働きを為すのではない．ただ＜今あること，起こるべきこと，以前に起こったこと＞（ﾎﾒﾛｽ『ｲﾘｱｽ』1,70）を示すものなのである．

56.1）＜そして神は，太陽のうちに，自らの幕屋を設けた＞（詩編18,6）．ここには転置法（hyperbaton）が見られる．すなわちこれは第二の顕現に関する記述なのである．したがってこの転置法は，文脈に沿って次のように読み解かれなければならない．＜太陽は，天蓋から出る花婿のように，巨人がおのれの道を走るように，喜びにあふれる．天の果てを出で立ち，天の果てを目指して行く．その熱から隠れ得る者はない＞（詩編18,6以下）．さらに＜神は，太陽のうちに，自らの幕屋を設けた＞．2）何人かの人々は，神が主の体を太陽のうちに置いたと解する．たとえばヘルモゲネスがそうである．しかるに彼らは，その「体」について，ある人々は神の幕屋であると言い，ある人々は信篤き人々の教会であると言う．しかるにわれらのヘルモゲネスは，「定めのない形でこれらの詩句を預言として述べているのだ」とする．そしておそらくは，未来形の代わりに現在時制を，また過去形の代わりに現在形を用いているの

だ，と言う．3）というのも将来の事柄であるという点については，現在の状況（katastasis）による周期が満たされたときに，信篤き義人たちの許に主は到来し，彼らを言わば幕屋として，主は憩うというのである．というのも同一の生まれをもったすべての人々は，同じ信仰と正義を選択するとき，一つの体となり，同じ唯一性にむけて帰還するだろうからである．4）しかしながら，ある者は頭のように，ある者は目のように，ある者は耳のように，ある者は手のように，ある者は胸のように，ある者は足のように，太陽のうちに照らされつつ置かれるであろう．＜彼らは輝く，太陽の如くに＞，もしくは太陽のうちに，である．なぜなら彼らは，太陽のうちにある支配的な天使たちだからである．5）というのもそれは日々の初めに置かれ，その様は，月が夜を支配するために置かれたのと同様だからである．しかるに天使たちは「日々」と呼ばれている．6）彼が言うには，日々は太陽とともにある天使たちとともに配されるであろう（あたかも身体における頭のように，一つである．それは太陽が一つなのと同様である）．そして彼らは，いつか何らかの周期をもって，自ら日々を支配する者たちとなる．それは主が，太陽とともにいと高き場所に到来するであろう．それは，彼に先立つ者が同じさまで到来したその場所にである．そして再び，彼らは進歩とともに上昇し，最初の住まいに到達するであろう．7）ただし，過去形で「置いた」と表現されているのは，最初に創られた天使たちが，もはや先慮をもって定められた事柄に奉仕するのではなく，休らいのうちにあり，ただ神に対する観想のうちにのみあるということを示しているのである．しかるに彼らに次ぐ者たちは，この天使たちが後にした陣列に専念し，その次に位置する者たちも類比的に同様である．

57.1）したがって，使徒によれば，至高の原初回帰（apokatastasis）のうちにある「最初に創造された者たち」がいるという（以下ｺﾛｻｲ1,16）．この「最初に創られた者たち」は，諸力であるにせよ，＜座＞であるのであろう．なぜなら彼らのうちには，信篤き者たちにおけると同様に，神が住まうからである．2）というのも各々の者は，自らの歩みを通じて神に関する固有の覚知を得て，その覚知のうちに神が休らう．そして，覚知によって認識を得た者たちが，永遠なる者たちとなるからである．3）そして＜主は自らの幕屋を太陽のうちに置いた＞（詩編18,6）という句は，次のように理解されるのではないだろうか．すなわち「太陽のうちに置いた」とは,「エールなる神のうちに導いた」ということであり，その理由は，福音書に＜わが神，わが神＞という代わりに＜エーリ，エーリ＞（ﾏﾀｲ27,46）と記されているということである．4）そし

て＜すべての権威，権能，力，そして名づけられたすべての名の上に＞（ｴﾌｪｿ1,21）という句の意味は，完成の域に達した人々は，人間，天使，大天使から，天使たちの最初に創られた本性へと導かれる，ということである．5）というのも人間から天使たちへと移された人々は，天使たちの許で1000年間教えを受け，完成の域へと還帰する．しかる後，教えを終えた者たちは大天使の権能へと移される一方，学びを終えた者たちは，人間から新たに天使へと移された者たちを教え，その後いま述べた周期に沿って，このように，身体固有の天使的身分(『ｽﾄﾛﾏﾃｲｽ』7.2.9.3をも参照)をもって，原初へと還帰するのである．

58）＜神の法には誤りがなく，霊魂を立ち返らせる＞（詩編18,8a）．ここで「法にして言葉」と言われているのは救い主自身のことであり，これはペトロが『宣教』の中で語っていることであり，預言者もまた然りである（『ｽﾄﾛﾏﾃｲｽ』1,29,182,3；2,15,68,2）．なぜなら「法はシオンから出で，主の言葉はエルサレムから発する」（ｲｻﾞﾔ2,3）からである．

59.1）＜主の証しは信に満ち，幼き者たちに智慧を与える＞（詩編18,8b）．主の律法は真実であり，子供たちに智慧を与える．子供たちとは，悪に染まっていない者たちと使徒たち，次いでわれわれである．2）だがそればかりでなく，主自らによる証しもまた，これを通じて受難を被る者が復活したのであるから，業そのものによって真実となった．信を堅固なものとすることに向けて，教会を導いたのである．

60.1）＜主への恐れは清く，とこしえに続く＞（詩編18,10）．ここで彼が述べているのは，恐れから信仰へ，正義へと転じた者たちは，永遠に留まるということである．2）＜主の裁きは真実である＞（同）．つまり確固として変わることがなく，分に応じて分かち与えられ，義人たちを＜信仰の一性へと＞（ｴﾌｪｿ4,13）立ち返らせる．3）これが＜その裁きは，悉く正しい＞（詩編18,11a）という句の意味である．そのような裁きは＜黄金や，高価な宝石にまさって望まれる＞（詩編18,12a）．

61）＜というのも，あなたの僕はそれらを守る＞（詩編18,12a）．ここで「僕」とは，たとえばダビデのような者ではなく，救われるすべての民を言う．彼らは掟への聴従の故に「神の僕」と呼ばれる．

62）＜わたしの隠れた罪からわたしを浄めたまえ＞（詩編18,13b）．ここで「隠れた」とは，正しきロゴスに反した思い，過ちを指す．これは，義しき者とは＜無縁な＞（詩編18,14a）ものだと彼は言うのである．

63）＜もし彼らがわたしを支配しなければ，わたしには咎がないことでしょ

う＞（詩編18,14b）．これは「わたしを，まるで主を迫害するかのごとくに迫害する者たちが，わたしを支配することがなければ，わたしには咎がないことでしょう」といった句と同義である．すなわち．もし人が迫害されることがなければ，その人は殉教者(証し人)とはならない．もし不正に対し，不正をもって応じないというのでない限り，その人は義しき人とは思われないし，苦難に耐える人とも思われることがない．（以下，欠落あり）

64）＜主よ，王を救いたまえ＞（詩編19,10）とはすなわち，「王国に向けて油注がれた民を救いたまえ」の意味である．それはダビデに限らない．それゆえこう付言される．＜われらがあなたを呼び求める日に，われらの祈りを聞き届けたまえ＞と．

65)「美しきものが心にのぼる」と聖書において述べられているのは（詩編19,5),「美しき意向が勝利を収める」ということである．

注

1　「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』(『ギリシア人への勧告』）―全訳―」，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』57, 1－82, 2010.3.「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』(『訓導者』）第１巻―全訳―」，同『文藝篇』59, 1－62, 2011.3；「同　第２巻―全訳―」，同『言語篇』59, 1－74, 2011.3；「同　第３巻―全訳―」，筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第３号，25－76, 2011.3.「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(『綴織』）第１巻―全訳―」,『文藝言語研究　文藝篇』63, 63－163, 2013.3；「同　第２巻―全訳―」，同『言語篇』63, 147－223, 2013.3；「同　第３巻―全訳―」,『古典古代学』第５号，27－93, 2013.3；「同　第４巻―全訳―」,『文藝言語研究　文藝篇』65, 77－158, 2014.3；「同　第５巻―全訳―」【改訂版】，同『言語篇』66, 57－148, 2014.10；「同　第６巻―全訳―」，同『言語篇』65, 41－136, 2014.3；「同　第７巻―全訳―」,『古典古代学』第６号，35－113, 2014.3；「同　第８巻―全訳―」,『文藝言語研究　文藝篇』66, 87－115, 2014.10.「アレクサンドリアのクレメンス『救われる富者とは誰であるか』―全訳―」【改訂版】，同『文藝篇』67, 51－87, 2015.3.

2　①『ヒュポテュポーセイス』(「概要」)，および②『過越について』，③『教会規定あるいはユダヤ主義者論駁』，④『摂理について』，⑤『忍耐への勧告あるいは新しい受洗者に』，⑥『書簡』，そして⑦「典拠不明断片」が伝えられており，これらについても「アレクサンドリアのクレメンス「断片集」」という標題のもと，本学紀要に訳出する予定である．

3　「アレクサンドリアのクレメンス『テオドトスからの抜粋』―全訳―」,『文藝言語研究』68, 2015.10に掲載予定.

4　C. Nardi, *Il battesimo in Clemente Alessandrino*: Interpretazione di *Eclogae propheticae* 1-26, Roma 1984.